

酷暑の候 宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部会員の皆様には、お健やかに過ごしの事とご拝察申し上げます。

コロナ禍による緊急事態宣言も解除され、「GoTo キャンペーン」も始まりいよいよ夏本番かと思っていた矢先に、東京どころか宮崎でもクラスターが発生してニシタチもまた足遠くなりました。

さて悉く中止や延期を余儀なくされていた自衛隊関連行事でしたが、先月 27 日月曜日に自衛隊高等工科学校 64 期生徒富士野営激励の為、北富士駐屯地まで足を延ばして来たところです。

北富士駐屯地は標高 1000m の高地で、梅雨末期の曇天のお陰で終日涼しい中での 25Km 行軍だったようですが、314 名中一人の落伍者も無く全員無事任務完遂との報告がありました。

私も久し振りに見た梨ヶ原徹舎に 44 年前を思い出し、目の前を元気に歩く生徒達の姿に往事の自分を重ね合わせ、保護者の皆様と「頑張れ！」と応援し乍ら目頭が熱くなった次第です。

ところで先月 10 日、「白善燁・ペクソニョップ」元韓国陸軍大將が 99 才で大往生され、日本のマスコミでも大きく取り上げられましたから、この件はご存じの方も多いことかと存じます。

ご逝去時の詳細はマスコミ報道等に譲りますが、私はこの老将軍と平成 21 年 9 月に DMZ の板門店でお目に掛かった事があり、握手をし乍らのツーショット写真等も撮影させて頂きました。

既に当時 88 才のご高齢でしたが、流暢な日本語を操り国防や日韓関係の大切さを諄々と説かれるお元気なご様子が、いまも鮮やかに脳裏を過ぎります。

11 年前の訪韓は「全国防衛協会創立 20 周年記念行事」の一環での韓国研修であり、そのとき提出したレポートや白善燁閣下に差し上げた手紙等を添付しましたので、是非ともご一読賜り、今とは異なる当時の日韓関係の空気感などを捉えて頂ければ幸いです。

私も改めて読んでみて、当時日本では話題にも上らなかった「新型インフルエンザ」が中国や韓国では発生しており、我々は全く躊躇せずまたマスクも付けずにソウルを始め各主要都市にある陸海空軍基地を歴訪したのですが、メイン行事であったはずの「韓国陸軍士官学校記念パレード」に、は感染防止のため列席出来なかった事などを、今ほろ苦く思い出しました。

また 30 日は台湾の李登輝元総統が 97 才でご逝去され、私はお目にかかる機会はありませんでしたが、その著書は随分拝読させて頂き、誠に啓蒙薫陶を受けた次第です。

正に先月は韓国と台湾の二大巨星が同時に墜ちて、戦後 75 年と云う時間軸やコロナ騒動の顛末をじっくり考えさせられた貴重な一ヶ月でもありました。

次項に小川先生のタイムリーなメルマガを転載致しますので、併せてお読み下さい。

・敵基地攻撃論という試金石

先日、政府の研究会で政策研究大学院大学副学長の道下徳成さんが提出したペーパーに目がとまりました。道下さんとは同じ研究会で18年間、ご一緒しています。

昨今の敵基地攻撃論について整理を求めるもので、同じ席に提出した私のペーパーと基本的に重なる内容でしたが、道下さんの提案の中で私の考えに欠けていた部分があったので、ご紹介しておきたいと思います。

それは、仮に朝鮮半島で戦争状態が起きたとき、日本が攻勢作戦に参加できなければ、それを理由に米国から「むしり取られるばかりの状態」が続く恐れがあり、先頭を切って攻撃に出ることはできないまでも、少なくとも米国、韓国の航空戦力の後に続いて作戦用航空機を投入できるようにしておかなければならないのではないか、というものです。

そうした政治的配慮もまた必要ではないかと道下さんは言います。まったく同感です。

日米安保条約は極東の平和と安全を目的としており、朝鮮国連軍の主力となる米軍に根拠地を提供し、国連軍後方司令部を横田基地に置かせている日本は、朝鮮半島有事において当事者であることを忘れてはなりません。その立場から、一定の条件下で自衛隊を投入するロジックを描くこともできるでしょう。

ここではロジックの問題には触れませんが、私はストライク・パッケージと呼ばれる航空戦力(電子攻撃機、戦闘爆撃機、制空戦闘機、AWACS＝空中警戒管制機、空中給油・輸送機など)について日本としての編成を示し、F-35、F-15、F-2 の戦闘機部隊を少なくともは二つ、投入できるようにしておくべきだと思います。先陣を切るために必要な電子攻撃機や作戦全体を統制するAWACS は米軍に任せ、戦闘機部隊を支える空中給油・輸送機によって朝鮮半島周辺で自衛隊機と米韓両軍を支える形です。

このとき同時に頭に浮かんだのは、日本の交渉能力の問題です。

湾岸戦争当時の米国のベーカー国務長官の回顧録『シャトル外交』では、日本は最も多い 130 億ドル(1 兆 6500 億円)を拠出したにもかかわらず、ほとんど言及されない扱いでした。

そうした対日スルーに打ちのめされた日本側からは、「やはり血を流さなければ認めてもらえない」という短絡的な声が沸き起こりました。

しかし、日本と同じように兵力を出さず、しかも日本より少ない金額しか拠出しなかったドイツは、その交渉姿勢を高く評価され、ベーカーから激賞されているのです。

これは、ドイツが自国の国益をとことん主張し、米国を納得させるだけの交渉能力を示した結果にほかなりません。

昨今の敵基地攻撃に関する議論は、湾岸戦争後の「血を流さなければ」という声と重なっている点で危うさを感じざるを得ません。

それでも、日本人が当時よりはるかに賢くなっていることに期待するなら、敵基地攻撃論は「したたかに国益を追求できる日本」になるための試金石になるかもしれないと思ったりもするのです。(小川和久)

「イージスアショア」が没になったから、即「策源地攻撃」とは少々乱暴な国防論かも知れませんが、最悪の事態を想定して最善手を打つのが戦略・戦術ならば、我々はあらゆる選択肢を排除すべきではなく、国家防衛責任者は英知と議論を重ねた上で、敵基地攻撃を含めた防衛戦略を国民に提示するべきと、私は考えます。是非とも皆様のご意見をお聞かせ下さい。

今年の夏休みは例年とは又異なった生活様式になりそうですが、色々皆で知恵を出し合ってお子さんやお孫さん達と一緒に、楽しい思い出作りに汗を流して頂いたなら幸いです。 合掌
令和2年8月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦